

中村俊定文庫
文庫 18
692



叙



洛小七戸あ梨栗田に鞍馬とらの名小
 類以之乎子或七去りはくぬり新大路あり
 戸外春あり跡ありなつ子長安の僧俗
 面を西小し東り新風小むく昏小還る
 急り月小く記程の歩くを隔あり就中

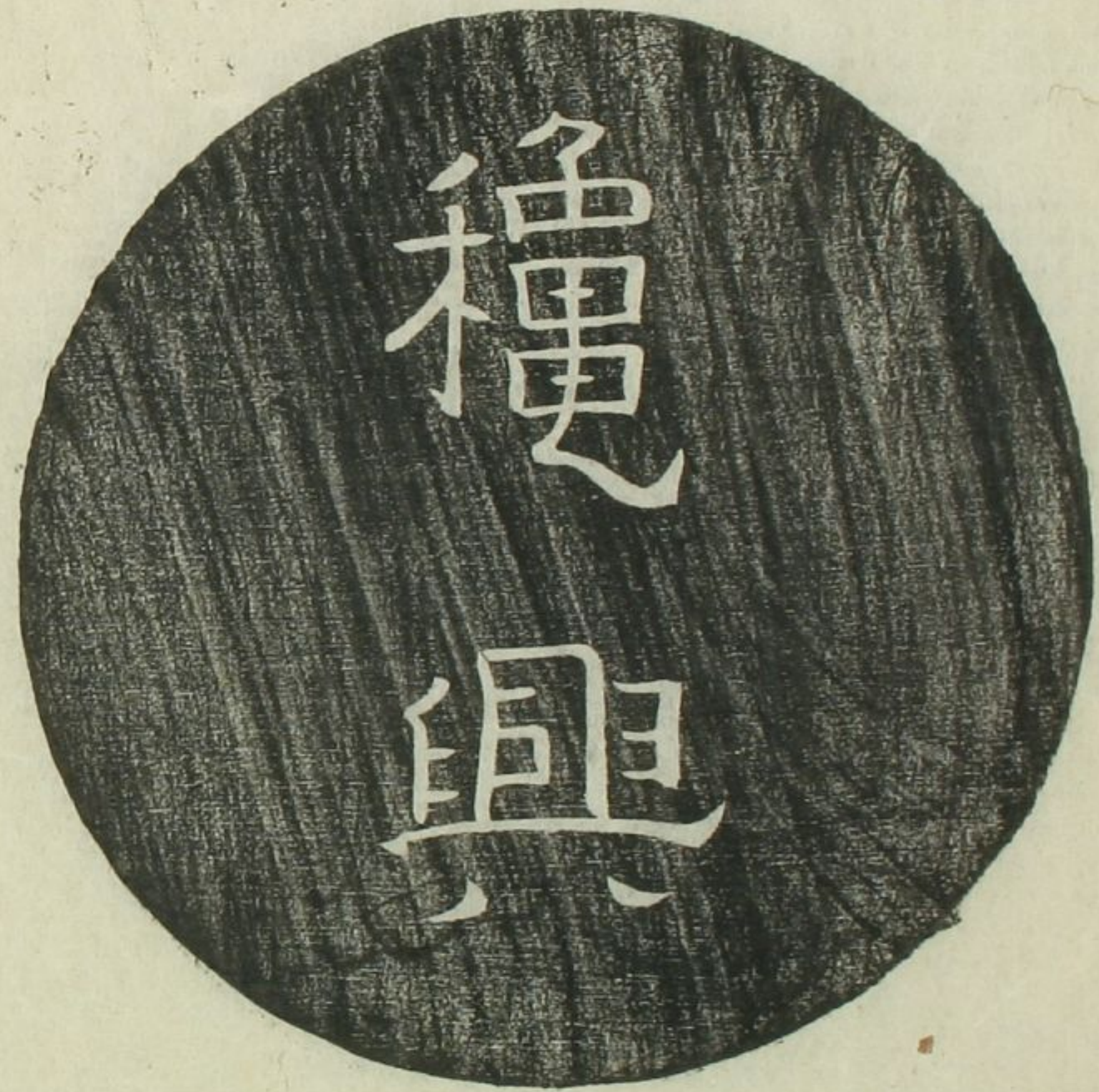
高雄通天の且夕の妹の色鮮やか
稲荷の山乃幸しし雲詠り歌も一入
於のしきまうち思ふひつ、於乃
栖をもる川程小黒羽織脱るもか
紅井乃折枝うちかこけき歌も
於の神く、の七ヶ乃家と産濃の溜さほくを

然と川那の巻小七もこころふ歌
色の強染小是を染むの神も
一と好小好といつを菴の葉下小都鄙の
むつひは歌傳とる事あり

寛政八乃年
盛録下院

丈左





風もあつらう
うらむを
種興のめ

一巻
関丈公



立秋

舊怨と川ほのくと 珠る唱うつ 一巻	贈赤起奥日の遠 る松乃 慕古	秋いま垣豆 さす乃 三千丈	金燈の影の玉 あ走る 有雅	葉の葉の深 る 他流
-------------------------	----------------------	---------------------	---------------------	------------------

雄山前も後も月あるの露
 秋風や螢地り死ねと祭以
 露ハ葉の下葉り成る露多
 うつたアミと露の山麓吹か
 むく白此軒を川もや秋乃暮
 秋一ある初と祭天乃川
 露秋の中や車宿の露か
 この露りても秋此とあふ

騏風
 摘古
 南曉
 花僊
 應美
 木貞
 桃江
 黒樹

秋の夕や霸王樹空に西岡
 林鳥

兩吟

空晴多物志と秋りう露乃末
 南曉
 秋の夕や霸王樹空に西岡
 林鳥
 秋の夕や霸王樹空に西岡
 林鳥
 秋の夕や霸王樹空に西岡
 林鳥
 秋の夕や霸王樹空に西岡
 林鳥

焚火やぬ火の下屋の底冷て
 曉
 浴衣の裾り足清むる露
 左
 ともや難り飯一む露の露さま
 曉
 かゝるも倒さやさる露
 達
 曉

訂裂のこの、えりふりさけ
 ありききし、悲しうら
 初陳の門出の甲意や中
 ありやと吹るも仙の雲
 風の志被こやうふ吹や
 泣く姉と背あけかり
 月とく花山根のとりし
 久しふりふれ初の花
 左 曉 左 曉 左 曉 左 曉

身を露やまに暁の余つ
 初も落ちし次回の仮橋
 秋風の陰ハやう初系也
 まよとるまよとるまよとる
 秋の路も大滑りまよとる
 影も後の折を思ふ
 傘の月面ふやもと紫とし
 大も里はや秋の秋風の
 左 曉 左 曉 左 曉 左 曉
 一条連
 丈花
 久左

深のあつらひのけしきよまの冠
冠鷲

秋の暮に秋の雲よ紫いなま
左乙

忘麻の暮さしぬをあとに
蘿長

冷くや拵扱をに且の南
加木

ふ流のりりもと紫ぬ秋の川
龍馬

とんほうの骸掃こゑを小登の
左澤

龍のこき終る星乃八日の
丈左

暮や影さくもとのあつらひ
東都 朱明

秋風の誘ふうこをや壺乃奴
秀太

さあくとえりやもふし秋の白
五明

琵琶抱し戀のあゝ紫のあき
巨溪

いふ書や後うせま秋京乃山
成美

弦さしう強ふ志こゝや系木
宗讚

碁も思むゆふ鮎をさひふり
貞松

海り向て小き花家の月あは、且々
暗きあつちを角力の感さる、梅居
露をうまう小くさるるこゝろなり

浅草生小き流るるを流るぬ、彦根 續后

白止て風流る此志なる、讃岐 芝峯

菊流るる花をひりつ好む、和州 如水

志好柿のまを甘し後の月、南都 暖駕

兩吟

ふれとの骨随白し妹の思、丈左

難ふかき歌車山の月、他力

健しらかあるひに辛く草を煮え、

好む川小きと義あるをりり、左

川りるる暮のかを好ぶらる、

あとしは花を初輝乃を、力

うさ中ふたをひのせり、

人の本履を先ちらうと借

左

方と川かひと控ぬるのあふ

力

空を石路り洞なる海

左

此海の神はいちたふ神ちん

力

細成勢の皆と伸あり

左

月ハ世の記とと取ふよと

力

露と川ぬると牛一の暖

左

秋乃末ちいさな馬ふふ習ひ

力

春と夏ものうね織とと

左

糸の糸乃こふ海とふふ

力

夕日かいつむ暮のあつ

左

兄^{ニラ}の中か鏡子を追まめ

、

石のしほしくこのをいふ

力

さなぬこふ糸の糸を糸かけ

左

夏乃屏風の半ふらけ

力

あつとふ此筆電ふゆえを

左

起りしそ 渡ふ五月の川 力
 所 細小 途 武者とも あり 渡 四 左
 扱あり 此 拒火 婦川と 語し 力
 狗 舎 ぬ衣を 以て さら さら かし 舎 せ 左
 夏 ごと 中 夜 也 泣 泉 力
 二ヶ月の 醉 跡 上を 照 せ 左
 紅 葉 深し ぬ 峯 へ 林 麻 へ 力
 露 零々 ぬ ぬ 神 なる 足 跡 の 川 左

け 以 ち ち や 敷 ふ ぬ ぬ 俳 諧 力
 暖 簾 の 何 屋 と も なく 閑 小 へ 力
 障 一 も つ の ち ち 朝 夕 の 白 左
 酔 も 酒 も う ち 母 の 茶 の 白 へ 力
 伏 見 の ち ち の 語 へ ち ち ち 力

句引 十八

臨 臺 の ち ち つ 渡 川 也 秋 の 暮

一 無 菴

芒以野や人さし人作る

伊勢津
他力

秋乃白哉のそ濱りりる

不求

志々雪うはくま被うりる葉塔

及江

冬の白を控ひて

至江中流波男も古ひと架

蘿道

飯揺るそ何おもふ乃月

左湊

翌りう志々ぬけさや小まの館のそ

息菴

木槿咲陰やあや〜乃巫家、聴雨

と川沙のあかふせさる濱火は、方鳥

只愁と川啼つるり蛛の蟬、杜影

そよくと吹添けらし茶まらぬ、轍左

冬田新稲子露の中をり、蘿外

揺葉小西日光アそ秋の風、寸明

冬室乃月滑るる白ひりり、六龜

夢車の音信添え種乃風、雲和
渙乃火を消果ぬ今糸の露、子良

麻の音やぬ種色しそ糸糸の山、雲津菊羽

夜赤彩やあけし乃星月夜、茶烟

糸糸とほしく川や彩乃暮、霞翁

下冷やあそくゆき糸波を、松崎豆左

名月おさかしく糸山もなかりり、松坂滄波

川末の志つゝありりう蝶乃あ、佳夕

糸糸の志つたをえも糸夕の露、子得

明ちうく尾上を下る麻乃夢、花珉

藤樹を去としハおのし糸の彩、為貞

け以の夢乃細りや秋乃蟬、李石

星の月芒おさくむ糸糸の形、柳司

あつらふや言はるるの月のあゝ、市泉
被るし女う色ぬもさち持、渭川
引船やこほれうすしそのか、汶水
秋のき何うさ落る一ちつく、為徳
種まるとさしし二日の月乃秋、景山
只きそおしをきるのね葉は、風敲
蓄妻乃そ十月色をきる籠、聞蕉
いつこしもななく一ちや吹乃床、
女
哥能

秋の月のあつらふや、何を啼、可也
引船の名跡漸きふ流れは、乙我
滴も止りう秋乃ささり、楚石
晴るし、空や入夕もさち、喜卿
白と秋もさちかちなる夕は、挑波
人かうつとあをそ秋乃風中、杜芳
投入や秋のさち流の活メる、長第
麻熟乃床喫也るさし尾は、曲昂

管の身も驚く床乃送以外 野田 尚道

雨の形やいとふく流る写露 、 遙江

桶乃輪の牛館より名柳 大塚 鳥翠

雲を石を紫於乃山 、 一水

路らしの蝶えつけり葉を葉 梯田 五蓬

山里のおのうちり葉白ひり 、 雀臺

な川を初雁りあひり 蛸路 舎し

網曳きる秋と夕もなかり 雲出 村花

雨吟

まや散むつと折るおろし 文左

新露を衣かき入る 菊羽

南を吸火乃照る 左

夕風の身をかき入る 、

空回るとをかけ合ふ 羽

ウ
娘川くとり取つてを打捨て

敵ふを姉りしそくあくらま

意ふうを時を苗ふおんや

管線へ伸乃ましくと位

いしくと思ひ合はるるあ案

さくあき眼乃粒あり粒ふ

女のちうか月乃あしくあり

多掛ふうはまを一たを

三

左

羽

左

羽

左

羽

左

扱おし海へ海へ杖を引てめ

米ちをうう提筆のいつとて

赤んくと雪のちやれまうう

裾形をふえおの雑物

とくくややゆらまの雪意

僧拱て驚りもくあ、

茶器うあまの筆をまはらほ

細を遠る案をかよハセ

四

羽

左

羽

左

、

羽

左

羽

冷やうくとまふも小清なる腰のお
雲とくくくく侍屋舟のよ
之ヶ月小海を暮る白い頓りて
鍛治う槌りも松子あうり
肩衣小箱時辰をわく一回と
おとろそ事を海樂小本音
ひらりと歩む板より花をこぼし
空押さず終る山乃又くまうく
左 羽 左 羽 左 羽 左 羽

^十 柳葉り流波下向を道ふこ
笑ひ上戸乃笑ひ臥く家
と葉羽衣のまを蝶の傳ひま
系とまのまうき乃初雪
まの風麻もやぬ髪を乱ま
ふの波をおもひ志つめ
ま終くその皆いね終乃月
左 丈 左 羽 左 羽 左 羽 左 羽

折芭蕉乃画：讚ス

白くも園ハ吹くう芒の穂

陸奥伊達

亀一帯の写るあつらぬ秋のあ

来車

いふまの秋の寫りてあつらぬのり

旭水

蝉のぬり一重う秋ハ又みろ

本宮 冥々

陣の写るあつらぬあつらぬ

秋田 五明

武州のふかきつく陣のあつらぬ

武州熊谷 雪江

はさきやあつらぬのさかろり秋の和

日松山 二川

楓を写るあつらぬあつらぬ天の川

遠州笠井

写るあつらぬあつらぬあつらぬ

上州官崎

穂さくあつらぬ夕の秋のあつらぬ

信善光寺

月や秋をりハ秋のあつらぬ

隠市

蒼かちあつらぬあつらぬあつらぬ

盧仙

海くさきあつらぬあつらぬあつらぬ

青峩

つらあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

猿左

飢人の這廣きし 暮葛の籠

信州伊那 伯先

影の月ハるる乃水田の邊

赤鳥岡

あゝ葉小ましくさや月乃蝕

汝蘭

名月や思ふと昔乃一重帯

山臯

冬席や吹集りし丘乃雲

一之

夕川秋や所く小枝乃色

飯田 蕉雨

虫いらくさ乃秋をすぬる

加賀 蒼君丸

萩さく起回し夕とあふ小紫、斗入

魚泳る田邊裏志きりぬ秋の白

上州木嶋 風狂

水鏡のそそ嵐小枝乃紫

紫陌

さしり井小稻一株乃うゆり小

伊予 鯉思

浪さしく松を吹散秋乃風

霞籠

歩渡るる滑り小川もうち

微風

三毛髪は混掃いしく秋乃露

赤羽

あさくゆふ月のあゝ葉光るあり

上武士 如淀

維多や終らむかたに三白の影、班雪

常山乃実志は初より其の白、似鳩

ふゆ子見乃角力不かく終り、大江丸

子と紅短靴終りそのあつひ、井六

後の月田毎のふくハかかりり、民来

人の執の嫁えふとて踊る能、奇淵

一徳や海かうかた終り、陸奥全盛調館

と子の縁系ともなすし小姓也更ぬ、調式

天乃川二節四節小叔明り、調六

崖の浪踏み悪きも碎ひ、調雅

昔年小星ハこそ被る衣の晴ぬ、中羅

系之庵あそささか小妹乃寂、長寸

厚乃まき袴つくろひて初る、文馬

思ひよ終ハせむとて能く終り、百童

龜のうづらむし

燕脂

夢をみるかきかきうたつて山又ゆる、山十

あつたやうなうたつたあつたあつた、南陽

おひらき腫を押しとておひらきとておひらき
暑の柄が一本のやうなうたつたあつたあつた
月のををひめくとおひらきとてあつたあつた
清法をまじひるあつたあつたあつたあつたあつた
神子おひらきとてあつたあつたあつたあつたあつた

秋のあや傳のあつたあつたあつたあつた、丈左

秋仙引

津連

秋風のあつたあつたあつたあつた、轍左

編戸のあつたあつたあつたあつた、六亀

ほろくとあつたあつたあつたあつた、丈左

ふらふらあつたあつたあつたあつた、方鳥

風を愛ふあつたあつたあつたあつた、羅外

あやめあつたあつたあつたあつた、轍

夕とあつたあつたあつたあつた、鳥

抱へのたふ衣乃糺たも
不しくと菟ニ籠ニ捕ハうハかへ
木の葉ニあハくハ市中ノ社
人妻乃法ニ交ハくハ影ヲ去リて
袂ニ不ニ重クたハ鏡ヲあハりテ
あハりト落シ月ヲ泣ク小ニ色ヲ
こノ一ニきハ吸ハるハ乃ハ無ク
あハるハ簾ノ影ヲをシつテ後ニ度ヲ
左 龜 轍 鳥 左 杜影 外 龜

次ハうハきハ恒ニ遠クるハのハ影
とハ免ハつカしハ其ノ影ヲ乃ハ小ニ色ヲ
福ノ次ハうハくハまハのハ法ヲ不
^ニ釋ハ多ク子ノ影ヲ乃ハ小ニ色ヲ
法ヲあハくハなハしハ関ヲをシえハかハりテ
けハ度ハハハまハ乃ハ更ク不ニ入ル
影ヲくハまハ乃ハハハまハはハりテ
晴ハもハ不ニ位ヲ乃ハまハ静ニあハりテ
寸 明

佛通つ瓜浦乃体之白
 接のり瓜歯乃体之さを歩譲り
 縁以風小灯をとく被たり
 人あつぬ眼をを筆か虫ほし
 十のりまのり系をを括 髪
 ちりくと瘡のまや瓜里乃月
 秋開くく牛うりかり
 十のり 酒花や木槎垣より香のまはる
 明 龜 轍 左 鳥 轍 龜 左

瓜之由とくし襦引はく
 二年くり反乃歩をを日
 途ささしき譲り歩り瓜
 是一枝木槎也ち之生ふり瓜
 西のりけろふむ乃高
 轍 鳥 歌 龜 鳥

句引

轍左 八句 六龜 八句 丈左 六句 方鳥 八句
 羅外 二句 杜歌 二句 寸明 二句 以上

月日星小色之之りりむ木権

陸奥水沢 都竜

世をいさふ人の音そ秋の遠

牙亮

鶉を以乃ぬ神鶉とひ也秋乃風

寛繩

月を待竹乃下卧雨あり

薰車

日々啼秋乃山蟬あられある

袒庸

秋晒小月照つ々々川カサ

羅状

夕風やもも吹おろさあじ山

魯臺

初秋やそ秋と入々粟の穂

二関 方字

床乃きと念傳と二秋の葉

甲州 可都里

秋吟し曉一露乃白和の露

筑前 金英

秋乃暮ふ乃雨そやそそ房乃り

筑前 湖桂

鶴御乃彼女くめりうそ葉乃上

安藝 凡十

三日月乃筈小き秋あふさうも

尾州 騏六

とまかくも秋とさうさふさうり

方明

是とそもをりものそ秋のま

士朗

新くやあハ月え此きほしけ
加賀 鹿古

うつまうと園を扱ふあまき
善提山 吉阿

木敷子や月何る音の子澄人
南部 東渚

秋の形、志つるを度まで氣外
鶏路

酒こ扱飲まで過しぬ秋乃き
浣素

秋さ神やつ秋あまのきまのき
守中

夕取葉赤まハこの、あま色
素卿

燈火ハ路くけしうまうく
一豆菴

吹ふほし秋ハあまうまの月
上州本嶋 白童

早稲乃きや色水の人あまのき
陸奥保原 凡鳥

暖ハる聲あぬ秋乃き
寸車

衣ハ川あまの秋乃風
不休

舟ハ流ハまあまのうらみの月
掛田 見車

蟲涼しそまの燈かまたふ
左鐵

つらけし魚あほしう秋乃風
寸雅

白泉、
亞笛、

律大、

東都、
鳥明、

花縣、

駿州、
石蘭、

南部、
草、

伊勢、
椿堂、

舍友、

八月十日、
あはれ、
あり、
あ、
あ、
あ、

月こゝい、

ほく、

歌仙抄

雲がを麻入の乃芒の草 丈左

山吹電さめしはるる乃重なり 曲郎

笠ふき露立ふり道来て 為負

夕風あそる片形ありり 子得

雪乃戸の月え小字弘むら神 李石

おくは乃高妻の子記ありは 佳夕

吹積川且乃露のな一ッ 汶水

才近乃ちを襟小纏へく 左

小侍従乃密小波を打うそ 貞

宵乃前形小燈火を消 郎

葉柳小冷や〜白のつふこ 得

夏時乃雛子妻ま〜形出 石

やまふ人乃尾上勢なり重なり 夕

鶏乃志母乃咽を渴のそ 水

吾風呂乃底暖か不露を徒 左

坊 變 少 田 了 者 乃 雪 月
 世 乃 亦 小 事 意 乃 乃 離 乃 肩
 風 亦 乃 乃 小 神 乃 以 奴 小
 釣 竿 乃 乃 細 乃 乃 引 乃 乃 乃
 急 小 角 母 乃 乃 出 乃 乃 乃 乃
 憂 意 乃 乃 梓 乃 乃 乃 乃 乃
 實 淋 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 裏 衣 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 貞 左 水 夕 石 得 郎 貞

乃 小 何 也 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 や 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 謹 小 履 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 然 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 業 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 三 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 今 小 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 亦 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 貞 左 水 夕 石 得 郎 貞

波の隈をえり振り 左
 鷺乃下にあくあきけり 水
 戸由さ家嵐ふはさけり 郎
 めきくとを答むたふし 得
 笠縫 忠乃蝶乃眠くま 夕

句引

丈左 六夕 曲事 六夕 為負 五夕 子得 五夕
 李石 四夕 佳夕 五夕 汶水 五夕 以上

各月やうけりよのハをう友 湖南 重厚

はこくとしやま踏床の息 騏道

芭蕉堂乃朝小せふふるまぬ乃おのほの
 あはれを

本乃色ハ脊とけ延くう屋の氣 乙道
 小乃端のあゝハのほそく冬の花 五角
 紀乃方ハ重細くも秋の雷 寸龍
 葉乃とくし侍子一重の月あは 李流

夕る乃女神色さくり下もさく

芦涯

床小友の明りや只まの松

百池

ささのつえりさ

山さく路旅籠を寄る目もさく

仙臺 鐵船

萩の神を懐小隊ありふる

武本法 雙鳥

はは乃るもさくもさくおはひしやおはひしはる
やこいさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく
丁とさくよなこいさくしひかきさくもさくしひかきさく
つふあひさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく
脚倒れ眼もさくしひかきさくもさくしひかきさく

ひやくと中吹おの夕この籠

丈左

おつうひやさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく

伊勢山田 神風館

後乃月露あはれさくしひかきさくもさくしひかきさく

寸大

唐あしやさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく

鴛温

難うももぬおとさくしひかきさくもさくしひかきさく

巴泉

曉やさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく

石人

おさくもさくしひかきさくもさくしひかきさく

桃家

花建瓦障もつらも秋の暮、丘高

淋しきも暮小春より暮乃秋、後水

松さの葉もさきと色つら秋の山、似蓉

小春さぬ、障もたはし物まは、東河

ふさし乃布のさつちもまは、雙石

夕暮の秋庭掃福の氣合は、坡反

ふ乃月もさきもさのさきも、桑戸

風雪ふるさき乃わかさや、落らぬ雁、女、幸

さきもさきもさきもさきも、之逸

鶯のさきもさきもさきも、不及

雲く照るもさきもさきも、長峯連、湖上

さきもさきもさきもさきも、楚貸

名月やまじり来乃、さきも

鏡乃さきも、野し

山

山

水と立小谷をたのむ秋の暮

李有

山登つて後おそくや明の床

川崎 周山

川秋や何葉うくの柿一ッ

左涯

碓乃お、る小ちるや子の露

曉浦

事家秋と月をえ合さるや鬼尾

鷺洲

月澄て水面ふかよふ碓の露

兔立

一と際、らしむ葉や雪乃端

滄洲

夕と秋や中をたのむ秋の暮

逸渾

ちかちかや露をたのむ秋の暮

關更

尾葉うの同さや秋乃る

都雀

うら枯の中ふるをたのむ秋の暮

月居

夕廻り家ハ尾をわかす秋の暮

班鳩

白不邊——るをたのむ秋の暮

其成

眼ふからぬ露乃古葉や秋の暮

雪下菴

陸奥の秋や雪の月々の月

陸奥掛田

不必

ささきもふまよふ秋の口をる水

蘇山

露のさ萩のうつらぬおきき露

姫路

寸草

いく度もあつる秋志はるき雪も

土印

あつる雪もあつる秋のさきのは

左律

ふもふ秋蟬乃売法形り

菴裡

雪左

月下乃とまり鳥の園小護り

あつる秋乃雨 函

一豆菴

秋来ぬとふさ柳乃葉うら

可楽

あつる雪しさくはる秋の身

梅曉

あつる雪もあつる秋の口をる水

陸奥二本松

し調

名月や古鏡をのほる人ハ 露

安達野

露調

東枯り陽あつる秋の口をる水

方静

秋乃あつる秋けあつる秋の口をる水

鳥石

秋乃風人乃むのよを

一豆菴

跋

此記と雖も力甚くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに
其の意は清く遠くは然るに

